

二〇一九年度 入学試験問題

法学部A方式Ⅰ日程・文学部A方式Ⅱ日程・経営学部A方式Ⅱ日程

二限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 四 問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

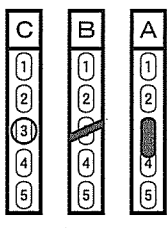
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。



(一) 正しいマークの例

(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

個人の幸福に社会ないし国がどこまで関与するかという点は、意見が分かれる難問である。それは、個人と国家それぞれの責任の間でどこに線を引くかという問題といつてもよいが、この問いは結局のところ福祉国家論に行き着くしかない。

『論語』には「寡なきを患へずして均しからざるを患ふ」という言葉がある。治世者の守るべき理念を語ったものだろうが、一般に福祉国家の是非を論じるときに、他人に対する「思いやり」や「共感」から所得再分配を支持する人が少なくない。そこに宗教がはたす役割も軽視できないだろう。しかしその一方で、そのような要素をすべて否定して、あくまでも個人の自由と所有権を主張する人がいることも予想できる。とりわけ、二〇世紀末以降の世界では新自由主義がいわば「時代精神」となったことからすると、こうした考え方を一概に退けることはできない。「自己責任」論が一定の説得力を持つ理由は何か、これはこれで検討に値する重要な問題である。

1 以上述べたような立場は、新自由主義といえは分かりやすいだろうが、この考え方を推し進めていくと、自由至上主義（リベタリアニズム）に行き着く。この自由至上主義と呼ばれる思想によれば、国家の役割は極小にすべきであり、それを経済面に応用すると、個人の財産権は自由の基本であり、そこに国家が介入して再分配の原資にすることなども許せない、ということになる。このような考えの人々を説得するのに、どのような理屈が有効であるか、それが検討すべき課題である。ここでは福祉国家や所得再分配をどのような論理で正当化できるのか、この点を考えてみよう。

そもそも自由が個々の至上の権利だとしても、その自由はどこまで及ぶべきだろうか。あるいは、経済の領域でいうと、個人の財産権はどこまで尊重されるべきかという問題である。課税は国家による所得や富の「収奪」という性格を持っていることは否定できない。しかしこの「収奪」はどの程度まで許されるのか、許されないのか。福祉国家に特有な所得の再分配はどこまで受け入れられるか、というように問題を整理することができる。

このような疑問に対してまず考えるべき点は、自由を最優先すると、自由の基盤そのものが掘り崩されることである。貧困

者が増えたり、窮乏の度合いが大きくなったりすると、犯罪が増え、治安も悪化する。その被害を受けるのが金持ちに多くなることは明らかだろう。あるいは、国家を極小化すると、貧困者の「野垂れ死に」を誘発することもあるだろう。それが社会的に許容されないのは、「隣人愛」や「同情」から説明することもできるだろうが、もう一つの論拠として、「野垂れ死に」が放置されると、「金持ち」の安全な生活さえもオビヤかされる^Aことがある。犯罪に遭うことまではなくても、

X

こともあるだろう。

自由至上主義者にしても無政府主義者ではないので、「夜警国家」のように、治安を保つ最低限の国家の役割は当然みとめるが、社会の貧困や窮乏が進めば進むほど、「夜警国家」の費用は増大する。その結果、課税が強化されるので、結局のところ、自由至上主義者の経済的自由がいつそうシンガイ^Bされるという皮肉な結果を招くのである。個人の「幸福」ばかりを追求すると、「幸福な社会」が遠のき、ひいては個人の「幸福」さえも危うくなる。このような利害得失の観点からみても、福祉国家の存在根拠²は明らかになると思われる。

ただしこの論理を徹底させると、増税される負担と犯罪が増えるコスト、あるいは犯罪を防止することによる利益を比較考量する立場もありうる。このような費用対便益(費用対効果)の立場を徹底させると、「金持ち」^Cにとってルイシン税(所得が高くなればなるほど、税率も高くなる)制度は合理的かどうかという問題にも行きつく。

あるいは、治安維持の仕事を国家に頼らず、個別にガードマンを雇ったり、城塞のように塙で囲まれた地域に住んだりという選択もありうるだろう。しかしその場合の費用が国家に任せるのと比べて低くなるかどうか、一概にはいえない。警備や防災には「規模の経済」、すなわち大規模になればなるほど費用も低下するという効果があるのではないだろうか。そうだとすると、私的な防護は得策とはいえないだろう。

以上のような利害得失の観点に立つ論拠と対比してみると、ジョン・ロールズによる「無知のベール」という思考実験は、いささか恣意的な想定であり、説得力がやや弱いように思われる。この「無知のベール」という説は、社会を律する原理原則を選ぶ場合に、人々はそのような選択をするかという設問から始まる。人々はその置かれている立場によって、さまざまな意見を

持つことが予想できる。しかし、もしすべての人が自分の社会的地位がまったく分からない「無知のベール」に覆われていると仮定したら、その選択は公正なものになるというのである。

所得や富の分配を例にすると、自分が置かれる境遇があらかじめ分からないとすると、貧しい家庭に生まれ、まともな教育を受けられずに育つ可能性は排除できない。自分が不利な地位に置かれる可能性がある人と、人々は最も恵まれない人を優遇する政策を是とするだろう。それで平等を志向する原理が選択される、というのである。

この「無知のベール」という想定は、人が生まれる境遇に偶然性が働くという現実を読み替えた、という解釈も成り立つ。偶然性は「運」といいかえてもよいが、私たちはいつ、どのような星の下に生まれるかを自分で決めることはできない。

私見を交えて、この点をさらに敷衍ふえんすると次のようになるだろう。まず注目すべきは遺伝にしろ、生後の環境にしろ、どのような条件の下に生まれるかによって、人の将来がほとんど決定されてしまうことである。生まれる境遇がこれだけ重要な要素であるのに、誰も事前に選択することはできない。不条理といえは不条理きわまりないことであるが、それが人間にとっての宿命である。

しかしそこで予想される反論は、生まれた環境がすべてを決めるのではない、努力や頑張りによって道が開けることもあるというものである。その見方はたしかに否定できないが、努力を続ける気力や体力にしても、遺伝や生まれた環境によって大きく左右される。親や周囲から無視されて育った子供が自分で運命を切り開く力をもつのは難しい。これも否めない事実である。

そうだとすると、社会的な成功者も実は「偶然」の要素が強く働いた結果である、彼あるいは彼女は自らの恵まれた「運」に報いるために、恵まれない人に分け与えることが当然である、という論理が出てくるかもしれない。

しかしこの論理だけでは、「金持ち」に福祉国家の所得再分配を受け入れさせるにはまだ不十分である。たとえ「運」に恵まれて富を築いたとしても、その富を他人と分かちあいたいとは思わない「Y」も必ずいるからである。いささか極端な話をする、一〇億円の宝くじを引き当てた人が、その大半をジゼン事業ジゼン事業に寄付するとはかぎらない。そうだとすると、別の理

屈を用意しなければならない。

そこで、自由至上主義や新自由主義に対する反論として最も重要な点は、「自由」が真空の中に存在するわけではない、という自明の事実である。

自由を保障するために、「夜警国家」のように最低限の国家活動の枠組みが必要なことは、自由至上主義者（リバタリアン）にしても認めている。しかし、国家の活動が不可欠なことよりも、なおいつそう強調すべきは、個々人が歴史的、社会的な条件の下で生きていることである。財産権を「自由」に行使する経済活動にしても、たとえばその前提となる土地は、歴史を遡れば先住民から奪ったものかもしれない。それほど極端な例ではないにしても、過去のある時点で利用権、ないし所有権が社会的に承認される手続きがあつたはずである。

この例のように、私たちは生まれ落ちた家族や共同体によって、自由に活動できる条件が「刻印」されて生きている。その意味で完全な「自由」はありえない。だからこそ、自分が所属する社会（あるいは共同体や国家）の安全や繁栄を願う感情が生まれてくるのである。その別の側面として、民族や国家が犯した歴史的責任を免れられないこともある。

（石見徹『幸福な日本』の『経済学』より。文章を一部改変した）

【注】 *ジョン・ロールズ 一九二一〜二〇〇二年。アメリカ合衆国の哲学者。

問一 本文中の空欄

X

Y

に入る語句として、最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号を

マークせよ。

X ア 枕を高くして眠れない

イ 火中の栗を拾う

ウ 盗人を捕らえて縄をなう

エ 石橋を叩いて渡る

オ 庇を貸して母屋を取られる

Y ア 博愛主義者

イ 国家主義者

ウ 合理主義者

エ 無政府主義者

オ 利己主義者

問二 傍線部「」以上述べたような立場」とあるが、それはどのような立場か。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 個人の幸福が実現されるためには、福祉国家が必要であると考える立場。

イ 所得再分配を支持する人々に対し、宗教がはたす役割を軽視しない立場。

ウ 所得再分配を支持せず、あくまでも個人の自由と所有権を主張する立場。

エ 他人に対する「思いやり」や「共感」から、所得再分配を支持する立場。

オ 「自己責任」論が説得力をもつ理由を検討する必要があると考える立場。

問三 傍線部2「福祉国家の存在根拠」とあるが、ここでその根拠となる考え方として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 貧困者の「野垂れ死に」が放置されると、社会から「隣人愛」や「同情」が失われていくため、国家が福祉を肩代わりせざるをえない、という考え方。

イ 国家の役割はできるだけ小さい方がよく、幸福を追求する個人の経済的な自由を守るためには、国家は所得の再分配だけを行っていればよい、という考え方。

ウ 経済的自由を求めると社会の貧困化は避けられないので、個人の幸福を実現しようとする国家では治安維持がしっかりと行われなくてはならない、という考え方。

エ 貧困者が増大して犯罪増加や治安悪化が起きることで、所得の再分配を行わない国家では経済的な自由をささえる安らかな生活さえ危うくなる、という考え方。

オ 貧しい人々が増えて社会が貧困化すると、犯罪が増えて治安が悪化するので、金持ちは警備や防災を国家に頼らず個別に行うべきである、という考え方。

問四 傍線部3「自分が所属する社会(あるいは共同体や国家)の安全や繁栄を願う感情が生まれてくる」とあるが、それはなぜか。本文の内容を踏まえて四十字以上、五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問五 著者の考えに合致するものをつぎの中から二つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 現在の世界では「自己責任」論が説得力をもつように新自由主義が「時代精神」となっており、そこで経済的自由をささげる利害得失の観点から福祉国家の必要性について論じることは、実は自由至上主義的な考え方を強化することにはしかならない。

イ 個人がどこまでも経済的自由を求めていくと、貧困化する社会において犯罪増加は避けられず、治安維持も個別に行うという考え方がありうるが、費用対効果の視点で見れば、個人で警備や防災を行うより国家で治安維持を行った方が合理的である。

ウ 自由至上主義や新自由主義を支持する人々は無政府主義者であり、「夜警国家」の費用や公正な社会原理についての考察によつて論拠を示されても所得を再分配する政府を選ぶことはないので、「隣人愛」や「同情」といった感情に訴えていく必要がある。

エ いささか無理のある「無知のヴェール」という想定は、生まれる環境が偶然に左右されることを読み替えたと解釈すれば、生まれた環境のおかげで社会的成功を手に入れた人々が環境に恵まれない人々と富を分かちあうべきだと考える、充分な根拠となる。

オ 境遇が人の将来のすべてを決めるとは限らず、努力によつて社会的成功を手に入れられるという考え方への反論として、人の境遇には偶然性が働き、社会的成功もその偶然によつてもたらされるという、費用対効果の立場から見た考え方は有効である。

カ 個人の幸福を手に入れるために経済的自由を求める人々に対し、自分の境遇がわからないという想定や社会的成功の偶然性を強調する議論は説得力を欠いており、どのようにして自由が実現されてきたのかという事実を指摘することが重要である。

問六 波線部 A ～ D のカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

人類史上、想像もつかなかったような巨大な「世間」ができあがったのは二十世紀になってからの放送メディアの登場だった。放送のおかげでわれわれの「世間」はかつて想像することもできなかったほどひろがったのである。マクルーハン^{*}はそれを「人間拡張」と名づけたが、「世間」と「人間」は同義なのだから「世間拡張」といってもいい。とにかくわたしたちすべてが共有できるような、いや、共有せざるをえない「ひろい世間」のなかに放りこまれたのである。

ラジオ放送というものはじめて実験されたのは一九〇六年、フェツセンというアメリカ人によるものだったが、その後二十年ほどのあいだにラジオ受信機というあらたな耐久消費財が発売され、先進国を中心に各家庭で聴かれるようになった。

こまかい歴史は省略するが、その強力な放送メディアにさいしよに注目した政治家のひとりヒットラーであった。かれの腹心の盟友、ゲッベルスは一九三三年にナチ政権発足とともにラジオ放送局を国営化し、みずから「国民宣伝省」長官になって連日プロパガンダ放送をおこなった。ナチ政権はラジオとともににはじまり、ラジオによってその基盤を確実にした、といってもよい。かれらが政権確立とともに放送局を占拠した、というのはじつに鮮やかな戦略であった。ラジオは単純明快なことでドイツ国民を心理的に完全に「X」^{〔X〕}してしまった。ほかに情報源がなくなれば、人間の思想や行動はわずかな時間でもかわってしまうものだ。わたしたちだって、新聞、放送が口をそろえておなじことをくりかえせば、いつのまにやらなんでも信じてしまう。歴史の改竄^{かいざん}だって、真実だと思ひ込んで疑うことを知らない。それを徹底的に実行したのがナチであった。

さらにゲッベルスがプロパガンダの達人として偉大だったのは、当時まだ不足していたラジオ受信機を大量生産して各家庭への浸透をはかったことだ。ゲッベルスは技術者を督励して「国民ラジオ」(Volksempfänger)の開発をおこない、安価で性能のいいラジオが量産されることになった。その結果ドイツでのラジオ普及率は一九三九年には世帯の七十パーセントをこえた。こうして天下無敵の巨大な「世間」ができた。そのスピーカーからはヒットラーの演説から愛国歌謡にいたるあらゆる世間話が

きこえてくる。「国民自動車」(Volkswagen)はいまもその名をとどめる世界有数の自動車会社としてアウトバーンとともにナチの遺産になっているが、「国民ラジオ」もまたたいへんな現代遺産だったのである。

ほぼ同時期に、アメリカもまたラジオの力に着目して、受信機の普及と電波の政治的利用をかんがえはじめた。ナチ・ドイツのようにあからさまな放送局の国営はできなかったが、軍事予算を迂回^{うわが}させてRCAという会社をつくった。放送内容はニュース、音楽などが中心だったが、このラジオを利用することをかんがえたのがルーズベルト大統領である。かれは「炉辺談話」(fireside chat)と名づけた定時放送で直接に国民に語りかけた。題名がしめすように、これは演説という気張ったものではなく気楽なおしゃべり、という趣向。これで大統領と国民のあいだの距離はちぢまり、戦争中のアメリカの世論と士気を高めた。「炉辺談話」がはじまったのは一九三三年。ゲッベルスによる「国民ラジオ」の構想とまったく同時代であったことは象徴的な符合といふべきであろう。

ひとことでは、「交際圏」すなわち「世間話」の輪は、ラジオという新発明品のおかげでついに「国家」というタガのなかにすっぽりと包みこまれ、ひとびとはラジオの意のままにうごくようになってしまったのである。

² ヒットラーとルーズベルトというふたりの象徴的リーダーのラジオ利用をみて、他の国もラジオのおどろくべき効果に気がついた。イギリスはBBCをつくり日本では大正十五(一九二六)年に日本放送協会、すなわちNHKが発足していた。ひとことでは、放送というコミュニケーション手段の実用化と「国家」とがセットになって二十世紀初頭の世界に登場したのである。この大変動は劇的であった。

かなり時間がたつてからラジオを導入した途上国での世間の変化もおどろくべきものだった。一九五〇年代のはじめのレバノンでは、それまでなにか問題がおきると村の長老の意見にしたがって行動していた村人たちが、ラジオの導入とともにだんだん「政府」のいうことをきくようになった。

Y な「顔」はみえないが「声」はきこえる。ひとびとはその「声」をつうじて想像もつかないような「ひろい世間」を知り、同時にそれが「国家」というものであることを知ったのである。いいかえれば、ラジオこそがナショナリズムの確実な基盤を用意してくれたのである。特定の国の特定の言語による放送によって「国民意識」が

はつきりできあがってきた。誇張していえば「ラジオの誕生」は「国民意識の誕生」だったのである。じじつ、いま世界には二百余の「国家」があるが、その半数以上の放送局は完全な国営事業である。

もちろん、新聞という強力なメディアはあった。しかし、同時刻に同一の情報に数百万数千万の「国民」が接触する、というおどろくべき時代がやってきたのである。新聞はそれを購読しないひともあるし、主張もさまざま。なによりも文字の読めないひとには無縁の存在であった。しかしラジオから流れでる声はすべてのひとびとに同時に到達する。

それに電波というメディアの性質から、周波数割り当ては国際機関によっておこなわれ、放送局の設置は各国政府による許可制によって管理されることになったから放送は程度の差こそあれ独占的になり、「国民」が接することのできる情報は限定的にならざるをえない。そんなふうにして、われわれは放送をつうじて背後に見え隠れする「国家」という巨大な「交際圏」のなかに組み込まれたのである。テレビの登場は「有名人」の「顔」もみせるようになったから、放送の威力はさらに加速した。

SNSの登場でマス・メディアの力が減少した、という説がある。たしかにネット端末が世界中で五十億台あるというのは事実だろうし、それが百億台になることもある。だがそれは五十億人が歯ブラシをもっている、というのに似ている。あまり意味のある数字ではない。五十億人が同時に、しかもいつせいに同一情報でつながっているわけではないからである。じつさいのSNSはせいぜい数百人をつなげるネットワークであるにすぎず、この五十億という数字だってマス・メディアがとりあげてはじめて全世界が知ったのである。局部的に、そして一時的になにかが「炎上」したって、そんなものマス・メディアのおおきな手のひらのうえでアリアが一匹、ちよつとうごいたようなもの。それにSNSが語る内容はマス・メディアからの引き写し。あるいはマス・コミ批判。なによりも多いのが放送・出版の前宣伝。SNSはマス・コミに寄生しているだけなのである。そうおもったほうがいい。

(加藤秀俊「社会学 私と世間」より。文章を一部改変した)

【注】 *マクルーハン マーシャル・マクルーハン。一九一〇―一九八〇年。カナダの文明批評家。

問一 空欄

X

Y

に入る言葉として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

X ア 洗脳

イ 説得

ウ 調伏

エ 誘惑

オ 浄化

Y ア 抽象的

イ 象徴的

ウ 即物的

エ 想像的

オ 具象的

問二 傍線部1「世間話」の輪」とあるが、その説明として最も適当なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア ささまざまな情報を共有するひとびとのつながり。

イ 価値観や生活感情をともにするひとびとのつながり。

ウ 気楽な会話やうわさ話が結びつけるひとびとのつながり。

エ 統制された情報によって支配されているひとびとのつながり。

オ 親子兄弟の関係になぞらえられるようなひとびとのつながり。

問三 傍線部2「ヒットラーとルーズベルトというふたりの象徴的リーダーのラジオ利用」とあるが、その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア ヒットラーはあからさまに放送局を国営化した。ルーズベルトは放送局を民間に委託しその自主性にまかせた。

イ ヒットラーは明瞭な戦略のもとにラジオ放送を利用したが、ルーズベルトは非戦略的な気張らない利用法をとった。

ウ ヒットラーは独裁者を象徴する、ルーズベルトは民主的な大統領を象徴する、各々のやり方でラジオを利用した。

エ ヒットラーもルーズベルトもラジオ放送を政治的影響下におき、もっぱらプロパガンダ放送のみをおこなった。

オ ヒットラーもルーズベルトもラジオ放送を利用して人間の思想や行動の変化をうながし、歴史の改竄をおかした。

カ ヒットラーもルーズベルトもラジオ放送を用い直接的に国民にわかりやすく情報を伝え、世論をたくみに誘導した。

問四 傍線部3に「それは五十億人が歯ブラシをもっている、というのに似ている」とあるが、どういう意味か。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 五十億のネット端末が世界中にあるというが、すぐそれは百億になるかもしれない、信頼すべき数字ではない、ということ。

イ 五十億という数値は、マスメディアがとりあげてはじめてひとびとが知っただけであって、確証ある数字ではない、ということ。

ウ 五十億という数字は、単にネット端末の数を問題にしているだけで、その機能のしかたを問題としていない、ということ。

エ 五十億の端末というが、歯ブラシを正しく使える人が少ないように、せいぜい数百人しか使いこなしてはいない、ということ。

オ 世界中の五十億の人がいつせいに歯磨きをすることがないように、五十億の端末が同時に動いていることはない、ということ。

問五 本文の内容と合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア ささまざまな主張をもっていたひとびとも、新聞やラジオ放送が口をそろえておなじことをくりかえすと、いつのまにかなんでもメディアの伝えることを信じてしまい、みずからの手で歴史の改竄までおこなうようになる。

イ ヒットラーやルーズベルトがラジオ放送というコミュニケーション手段を効果的に政治に利用している姿をまのあたりにして、イギリスではBBCを、日本では日本放送協会、すなわちNHKを発足させることになった。

ウ 先進国より遅れてラジオを導入した途上国では、その世間の変化もおどろくべきもので、村人はそれまでの長老支配から解放され、政府の統治と統制がうまく機能する民主的な近代「国家」の成立へと向かった。

エ 二十世紀に入って登場したラジオ放送は、新聞のもっていたさまざまな限界を克服し、おおくのひとびとへ情報を提供しその心情や行動に多大な影響をあたえたが、さらに画像を見せられるテレビは放送メディアの威力を加速させた。

オ SNSという新しいメディアは、五十億台をこえるおおくのネット端末を通じてひとびとを結びつける大きな力をもつが、その性格を理解しうまく利用しないと、マス・コミのつたえる情報を拡散させるだけになってしまう。

問六 筆者は、ラジオ放送がナショナルリズムの確実な基盤を用意した、と主張しているが、それはなぜ可能となったのか。つぎの形式に従って、四十字以上、五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

ラジオ放送は

から。

〔三〕 つぎの文章は『保元物語』の一節で、戦いに敗れた崇徳院一行が山中を逃げる場面を描いたものである。以下を読んで後の問いに答えよ。

その後、家弘いへひろ、「敵、定めて追ひ参らせ候はむずらん。とうとうのびさせ給ふべき」よし申しければ、「今はこの身のことをば各々おのづかしるべからず。いづかたへもたち忍び、汝等なんぢらが身を助くべきなり。さしもの奉公をいたして身をいたづらに捨つることこそ不便ふびなれ」とて、よに御心弱よげにて御涙を流させ給ふ。各々この御有様を見参らせける心のうち、さこそは悲しかりけむ。①
涙を押さへて申しけるは、「二度ふたたび参らせ上げ候ひなむ命、なじかは二度取り返し候ふべき。兎も角も君のならせおはしまさん御行末を見果て参らせてこそ、塵灰ちりこともなり候はめ。見捨て参らせてはいづくへか罷り退き候ふべき」と、声々に申しければ、「志は誠まことにさることなれども、我が身ばかりこそ、たとひ敵襲ひ来たるとも、手を合はせ、降を乞はむに、なか助け参らせざるべき。② 汝等付き添ひては、防ぎ戦はむずらん。③ なかなか悪しかりぬとおほゆるぞ」と、泣く泣く仰せければ、兵ども皆涙にむせびて、強ひて御供に候ふべきよし申しけれども、「かなふべからず」と仰せ再三に及びければ、力及ばず涙とともに落ち行きけり。月日とも仰ぎ奉る君をば、知らぬ山路に捨て置き奉る。海とも山とも頼み奉る左府さふはいひ甲斐かひなくなり給ふ。ただ木に離れたる猿のごとく、陸に上る魚に異ならず。身の行く末も思ひやられ、君の御名残のほども悲しければ、泣く泣く後をかへり見て涙にくれ、足に任せて落ち行けば、中有ちゆうにまよふ罪人も思ひ知られて哀れなり。院も、この御有様にては、兵どもありとも何の詮かたかはあるべきと思し召されつれども、さすがまた散り散りになりはてて、ただ御一所残らせおはしませければ、御心細く頼む方なく思し召されける。今は家弘・光弘父子ばかり候ひけるが、御手を取りて、谷の方へ引き降ろし参らせて、御上に柴を切りかけて隠し置き奉る。父子二人はあたりの木の茂りたる中を陰として伺候しご仕りける心のうちは、いかばかりのことをか思ひけん。

〔保元物語〕より

【注】 * 左府 左大臣のこと。ここは崇徳院の味方であった藤原頼長をさす。この戦いで流矢に当たり、重傷を負って

落伍していた。

* 中有 死後、つぎの生を得るまでの期間のこと。

問一 傍線部 a「とうとう」b「なかなか」c「詮」の意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

a とうとう

ア 必ず

イ 速やかに

ウ ついには

エ 落ち着いて

オ ひたすら

b なかなか

ア たいそう

イ 多少

ウ ほどよく

エ 逆に

オ 中心的で

c 詮

ア 結論

イ 目的

ウ 道理

エ 希望

オ 効果

問二 傍線部「今はこの身のことをば各々しるべからず」について、「この身」が誰の身のことを指しているか明確にし、さらに「しる」の語義に注意して現代語訳せよ。

問三 二重傍線部①「けめ」②「め」③「べき」④「ぬ」の文法上の意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 打消

イ 完了

ウ 推量

エ 意志

オ 過去推量

カ 過去の伝聞

キ 過去

ク 婉曲

問四 傍線部2「一度参らせ上げ候ひなむ命、なじかは二度取り返し候ふべき」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 一旦敵に渡した命なので、改めてそれを敵から奪い返すことは難しいでしょう。
- イ 一旦さしあげる覚悟のできた命を、あなたさまはなぜ二度も返そうとなさるのですか。
- ウ 敵に渡す覚悟ができた命を、いまさら取り戻して生きながらえることなどとてもできません。
- エ 一度あなたさまにさしあげてしまった命を、二度取り戻すことはできるのでしょうか。
- オ すでにあなたさまにさしあげたも同然の命を、いま改めて取り戻そうなどとは思いません。

問五 本文の内容と合致しないものをつぎの中から二つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 崇徳院は逃走に際し、敵に見つかっても自分一人ならば助かるかもしれないが、武士たちを伴っているのは戦闘になるかもしれないと考え、彼らに暇を与えた。
- イ 崇徳院は最後まで供をしたいと懇願する武士たちに対して、彼らが自分に忠義を尽くして命を落とすことを哀れに思い、武士たちに落ちのびるよう説得した。
- ウ 崇徳院はあれこれ説得してようやく多くの武士たちと別の行動をとることができたが、そうになると逆にあてにできる者がいなくなったことで不安を募らせた。
- エ 崇徳院は最後まで自分の供をしたいと懇願する武士たちと決別したが、家弘・光弘父子の強い希望を受け入れ、この二人だけを供として山中をさまよった。
- オ 崇徳院とともに山中を逃走する家弘・光弘父子の心境は、これまで頼りにしていたものが失われ、まるで地獄へ向かう罪人のように心細いものであった。
- カ 崇徳院と分かれ、左府(藤原頼長)も取り返しつかない状態になってしまい、大きな後ろ盾を失った武士たちは、このさき自分たちはどうなるのかと不安を感じた。

問六 『保元物語』と同じジャンルに属する作品をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 日本書紀

イ 大和物語

ウ 大鏡

エ 愚管抄

オ 太平記

